

令和7年度 とくしま政策研究センター調査研究  
出羽島における地域とつながる活動と  
シビックプライド醸成に関する  
調査研究報告書

徳島県南部総合県民局  
令和8年3月

## 【目次】

調査概要 .....	1
序章 出羽島とは .....	2
第1章 家鴨舟 .....	3
家鴨舟に関する他地域での聞き取り調査 .....	4
家鴨舟レプリカ制作 .....	5
家鴨舟制作キットの考案 .....	7
体験用家鴨舟制作 .....	7
家鴨舟のテスト .....	8
第2章 艦・艦船 .....	9
聞き取り調査 1回目 .....	9
聞き取り調査 2回目 艦と艦船の歴史、素材、使用用途 .....	10
資料調査 昔の写真などを調査 .....	10
島内で見つけた艦の再生 .....	11
艦船の確保 .....	13
第3章 学生・若者たちと連携 .....	15
①聞き取り等調査 .....	15
②艦再生事業への参加 .....	19
第4章 体験プログラムの企画・提案 .....	21
①出羽島ラーケーション（離島留学）実証 .....	21
②出羽島生活体験プログラム実証 .....	23
第5章 シビックプライドの醸成に関するアンケート調査結果 .....	25
第6章 これからの出羽島は・・・ .....	30
その他 .....	31
●デジタル化した出羽島に関する資料 .....	31
●牟岐町観光ボランティアガイドの会からの聞き取り調査 .....	31
●大生丸について .....	33

## 調査概要

### ① 目的

出羽島（てばじま）における地域資源の再評価を行い、木造船を用いた伝統的な漁労や子供たちの遊びをはじめ、食文化や暮らし方など出羽島ならではの生活文化について調査し、これらの体験化に向けた検討や仕組み作りを通じて「シビックプライド（地域への誇り・愛着）」の醸成を図り、よりよい関係人口の創出・増加を目指す。また、調査結果を今後の「みなみ阿波」における地域振興・関係人口施策の基礎資料とする事を目的とする。

### ② 概要

出羽島の生活文化を多角的に調査・分析し、その価値構造を明らかにするとともに体験化および持続可能な仕組みづくりに向けた基礎データを収集する。

### ③ 調査手法

学生や20代の若者、社会人と共に島民、島出身者から聞き取り調査を行い、同時に文献資料や古写真の収集を進める。その中で島内外の世代を超えたメンバーで古具の再生を行い、共に体験プログラムの提案、実施、検討を進める。

### ④ 結論

出羽島の歴史や生活文化は単なる過去の遺物ではなく、現代社会から失われつつある価値（共助・繋がり）であり、「学び・体験」できる資源として高い可能性を持つ。

持続可能な体験を構築・継続することにより地域の誇りやシビックプライドを高め、新たな関係人口の創出に繋がると考えられ、これらの結果は、今後の「みなみ阿波」地域振興施策に資する基礎的知見を提供するものである。

### <本報告書における用語>

出羽島（てばじま）	● 徳島県海部郡牟岐町に属する、牟岐川河口の南約4kmの太平洋上に位置する離島
家鴨舟（あひるぶね）	● 出羽島で用いられていた子供の遊び道具としての舟
櫓（ろ）	● 和船を推進させるための木製の道具
関係人口 （かんけいじんこう）	● 特定の地域に居住・定住する「定住人口」でもなく、観光で一時的に訪れる「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に、そして継続的に関わる人々のこと
シビックプライド	● 地域に対する誇りや愛着に加え、地域をより良くしようとする主体的な関わり（当事者意識）を含む概念 （※シビックプライドは、株式会社読売広告社の登録商標である）
ラーケーション	● 「学び（ラーニング）」と「休暇（バケーション）」を組み合わせた造語
みなみ阿波	● 徳島県南部エリア（阿南市・那賀町・美波町・牟岐町・海陽町）のこと

## 序章 出羽島とは

### 居住前史

史料に見る出羽島の初見は、嘉禎三年(1237年)『九条家文書』に含まれる最勝金剛院文書に記されている。「東限手波島東海」と記され、島内に十六世紀代(戦国時代)とされる五輪塔が見られることから、何らかの人の生活があった可能性がある。

### 移居前

正保二年(1645年)、阿波藩の仕置家老から牟岐村の庄屋へ出羽島・大島の管理に関する「覚書」が渡された。

### 移住開始

享和元年(1801年)の蜂須賀家文書によると、牟岐浦から七名が移住することに応じた。

### 近代の出羽島

出羽島における主要な産業は鯉漁であり、明治後期に出現する動力船により漁場が拡大されていった。島の人口も増加し、大正から昭和初期にかけて最盛期を迎える。

### 大正から昭和初期

出羽島は鯉漁の最盛期を迎え、山村雪太郎氏による※大正沚の発見という功績が見られた時期である。漁船の動力化・大型化が進むとともに、沖合から遠洋の漁場へと進出し、出羽島は「遠洋漁業の島」として、日本各地にその名を知られるようになる。

※大正沚：鯉漁の好漁場

### 現在の出羽島

出羽島では、これまで宅地の統廃合がほとんどなされなかったことから土地形状に大きな変化がなく、近世・明治・大正・昭和初期の建造物が周囲の環境と一体となった、伝統的な漁村集落の景観が今なお色濃く残されている。離島という厳しい環境へ移住し、宅地・田畑を切り拓き、漁業と共にたくましく生きてきた人々の生活の証であり、地域の誇るべき魅力であると言える。(出羽島の歴史 牟岐町教育委員会資料より抜粋)



港の中に並ぶ昔の鯉船 (平野邦子さん所蔵)

## 第1章 家鴨舟

昭和 27 年（1952 年）発刊のアサヒグラフに出羽島の見開き記事を確認した。その中で特に注目すべきは子供専用の遊び船（家鴨舟）だった。なぜ家鴨舟と呼ばれていたか不明なため、呼称の由来を解明すべく聞き取り調査を行ったが正式名称は無く、ただ「小舟」と呼ばれていたようだ。

また、紙面資料に加え動画資料も見つける事が出来た。昭和 62 年（1987 年）放送の NHK 番組「父を待つ青い家」では、出羽島秋祭りの様子に家鴨舟を用いた競争（レース）が実施されている様子が記録されていた。

当該小舟は小学生ぐらいまでの児童が乗って遊んでいた。多くは親が子供用に自作したものであったため、防水性能も十分でなく木の浮力だけで浮き、船の中に入った水をかき出しながら遊んでいたようだ。両手に持った木板で漕いだり、その船にあった櫓を使ったり、児童は遊戯を通じて幼少期から基礎的な操船技術を自然に習得していたものと推察される。

アサヒグラフの記述によれば「船の長さは約 2 メートル、入学前の子供たちまで軽々と操って時には一里から離れた牟岐まで遠征する。溺れるのは先生の方が多いようだ。」と記されている。（この記述から未就学児が日常的に家鴨舟に乗っていた事が窺える）

家鴨舟はすべての家庭に普及していたわけではなく、工作に長けた親を持つ家庭や大工に製作を頼める家庭を中心に所有していたようである。

現在 80 歳を超える方からの聞き取りによれば、家鴨舟の製作には余った木材や 2 m 弱の杉板などを使っていたようである。造り方は各家庭それぞれで様々な形をしていることが写真からもわかる。



アサヒグラフ

## 家鴨舟に関する他地域での聞き取り調査

他地域でもこのような子供の遊び道具と文化があったのか町内や近隣離島で調査を行った。調査対象は昔から代々その地に住んでいる人、漁業者、70、80代の方々、町役場の方々など。調査方法はSNS(LINE やショートメッセージ)を使ってテキストでのやりとりと対面での聞き取りを行った。

### 聞き取りを行った地域

- ・牟岐町東西港
- ・古牟岐
- ・海陽町竹が島
- ・阿南市伊島
- ・兵庫県沼島
- ・高知県大月町栢島
- ・東京都新島

### 各場所の回答は下記の通り

- 牟岐町東西 港周辺の漁師さんたち  
子供用船 無し  
その他遊び方／洗濯板、木の板などで波に乗っていた
- 古牟岐 地域住民  
子供用の船 有  
大工さんに遊び道具として造ってもらっていた。防水性無し。現在の港で遊んでいた。  
その他遊び方／洗濯板、木の板などで波に乗っていた。
- 竹が島 漁師  
子供用の船 無し  
その他遊び方
- 伊島 部落長  
子供用の船 無し  
その他遊び方 伝馬船を艘で漕いで競争をしていた。
- 沼島 漁業組合長  
子供用の船 無し  
その他遊び 聞き取り依頼中  
3年ほど前から徳島県立博物館、兵庫県立博物館が研究に訪れ70、80代と立ち合いしているが子供の船の資料、文献、話は出てきていない。
- 栢島 町役場に聞き取り依頼  
現在調査中 時間がかかると返答
- 新島 民宿経営者 50代  
子供用の船 無し  
その他情報

70～80 歳代の層からは、「（子供用の船の）そんな記憶は無い」とのことで具体的な確認が出来なかったが、協力者の岩永氏から高齢層の一人である山本亀次郎氏（昭和3年（1928年）生）による証言を得ることができた。以下は岩永氏の語りをそのまま伝える。

#### ○当時尋常小学校（6 歳から 13 歳）時代のお話

今ある黒根港が存在していないとき、大きな貨物船が新島に直接接岸する事が難しく沖合まで荷物を新島から大人3人くらいが乗る小さな舟（カッコと呼ばれていた）で受け取りに行くいわゆる「はしけ作業」としての小さな舟はあったそうです。子供ら用の遊ぶ舟ではなく生活物資を運ぶための小さな舟（カッコ）だったようです。

大型船が来ない海が凪だときには、大人の承諾をもらって子供たちがそのカッコで遊んでいたりはしていたとのことです。（なぜ、カッコと呼ばれていたのかはわからない）

またそのカッコを停泊させたりする棧橋的な役割をする（木のトロッコと話していました）が貧弱だったのか海上が荒れては壊れ作っては壊れしていた様でした。

この新島にはもう一つの部落（若郷）があり多くの漁師が一同となって漁をする大掛網がありました。そこではより小回りの利く小さな伝馬船（「てんまっこ」と呼ばれていました）があり若郷の子供たちはその「てんまっこ」で遊んでいたようです。

調査範囲は限定的ではあるが、他地域で同様の船があったと聞けたのは古牟岐だけだった（ただし、写真等の証拠は現在のところ未確認）。その他の場所では子供用の船があったという事は確認できておらず、写真等も見つかってはいない。昭和26年（1951年）制作の映画（「島の子供たち」）の描写では、子供たち向けの娯楽が無いと言われており、遊び道具がなかったことから独自の船遊びが誕生したと考えられる。出羽島港は北向きの「巾着型」という地形で、波風にめっぽう強く、当時は遠浅だったため子供たちの遊び場に向いていたことも発展を後押ししたと考える。また、古牟岐には出羽島住民の親戚も多く、交流があったことから家鴨舟の情報が伝わったものと推察する。

以上の結果から、家鴨舟は出羽島を起点として発展した島固有の遊び文化だと思われる。

## 家鴨舟レプリカの制作

以下のプロセスを経て、家鴨舟のレプリカの制作を牟岐町内の大工に依頼した。

- ・昭和27年（1952年）発行のアサヒグラフの写真を見ながらアイデアを出し合った。
- ・映像資料をもとに形、サイズを設定した。
- ・先代の大工（実父）は船も造っていたようでそこからの知識も利用した。
- ・牟岐町の船大工から当時の木造船の話聞いた。
- ・漁師からの意見、知識を参考にした。

造り方は下記の通り。



1. 最初に形の模型を作る

2. 人が入って大きさを確認する



3. 大体の形を決め先端と内部の基本構造を作る
4. 先端の木材は両側からの木材が組み込まれるように工夫
5. 逆台形の内部構造に沿って杉板を貼る。  
(逆台形にすることで船の反りが生まれる)



(写真：和西建築より)

## 6. 船底を貼り終了（この模型の船底には床材が使われている。）

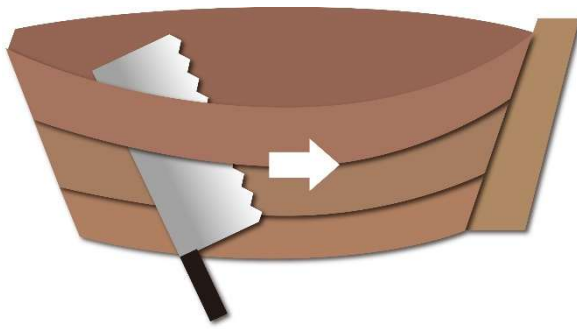
### ▶補足▶伝統的な和船建造における高度な技術

木造船は側面の板を曲げる作業が困難を極める工程であった。

当時、小さな作業場の中で作り、壁から船に木材を押し当て力で曲げてる手法や、木材を蒸しあげ柔らかくしてから曲げる手法が用いられていたことを船大工から証言を得た。

杉板を側面に貼っていく場合、上の板と下の板の間の形がカンナでは合わず、ノコギリを使い「すり合わせ」と言う技法を使って隙間を無くし防水性を確保していたようである。すり合わせには各部に合った複数のノコギリが必要となるが、現在はその什器も無く、技術を知る人も極端に少なくなっている。すり合わせを行った後、さらに防水性を高めるため、「ノミ」と言われる作業が行われていた。

※「すり合わせ」及び「ノミ」については次のイラストを参照のこと。



・すり合わせ  
貼り合わす木と木の間にノコギリを通し  
上と下の板の接合部分の形を整える。

・ノミ  
すり合わせを行った部分にヘラとトンカ  
チを使い木の皮を詰め込む。

## 家鴨舟制作キットの考案

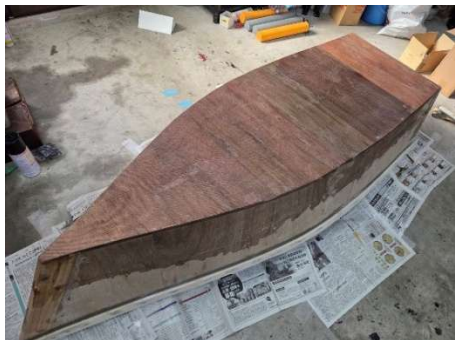


合板を使いもっと作りやすく設計したキットを考案した。形を統一することで量産が見込まれる。（量産でき防水対策ができれば、実際に乗れる船を数作り、子供たちへの体験プログラムとしての活用も検討できる。）

## 体験用家鴨舟の制作

上記のキットを使い、水に浮かべられる家鴨舟を造った

- ・合板を使った家鴨舟に FRP 作業でガラスを貼る
- ・内側には浮力を持たせるために5センチのスタイロフォーム（水色）を2重に仕込む
- ・デッキにはヨガマットを切って貼る
- ・合板と FRP により船体の重量が大幅に増加した。
- ・最終テストを行った。（令和8年2月8日実施）



FRP での防水作業

## 家鴨舟のテスト

成人男性と女性の2名で船のテストを行った。

テストの結果、家鴨舟は、子供が乗船可能な浮力を有していることが実証された。推奨体重は 35～40 キロまでの子供（乗船の際は保護者、またはサポート役、遊び方を知るガイドが必要）。成人男性（約 80 キロ）になると浸水の可能性もあり乗船が難しいと思われる。なお、安全に遊ぶためにライフジャケットの着用は必須条件とすべきである。



後述する島内での資料調査により、家鴨舟に乗って遊ぶ子供の写真が発見できた。加えて、昭和 26 年（1951 年）に蔵原惟繕氏が大学の卒業制作として出羽島を舞台に撮影した映画の中には、秋祭りの日に行われていた家鴨舟のレースの様子が記録されている。この映画フィルムは出羽島小学校に保管されていた。



（平野邦子さん所蔵）



映画 「島の子供たち」

## 第2章 櫓・櫓船

家鴨舟の調査と並行して、島内での文化資源を活用した体験プログラムの可能性を検討した。島民の方々に相談している時に「櫓で漕ぐ体験が良いのでは」と 80 代の方々から助言を得た。そこで櫓漕ぎを体験化するため、聞き取り調査を行った。

櫓（ろ／櫓）は、日本の和船で主に使用されてきた、人力で船を推進させる伝統的な木製の道具である。船尾や側面に固定した「櫓脚（ろあし）、櫓ぐい（ろべそ）」を支点とし、水平な水中で左右に振ることで揚力を生み出し、効率的に進む構造が特徴である。

### 聞き取り調査 1回目

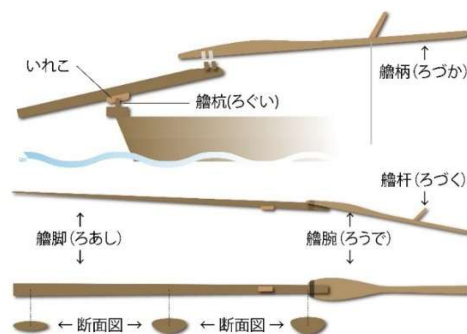
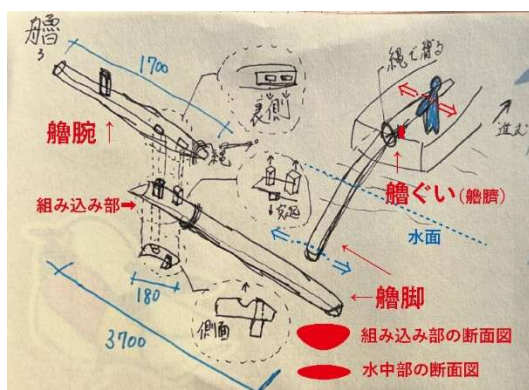
- ・ 島内に昔から使われていた櫓があるのか
- ・ 櫓で漕いでいた船があるのか

#### 結果 櫓に関して

- ・ 調査の結果、櫓は島内の漁協組合建物や空き家の軒下、倉庫で複数個残存しているのを確認した。
- ・ 櫓は単一の部材でなく 4 パーツに分かれていることが判明。  
櫓は水に浸ける「櫓脚（ろあし）」、操船者が持つ長い棒状の「櫓腕」、操船者が握り持つ「櫓杯（ろづく）」、船側に設置する櫓杭と接合し、支点の役割となる「いれこ」で構成されている。 ※イラスト参照
- ・ 現存する櫓の多くは部材が欠けており、全てのパーツが揃った櫓は少ないが昔のままの櫓を見つける事ができた。

#### 結果 櫓船に関して

- ・ 昔ながらの櫓で漕ぐ木船は現存していない事が判明した。
- ・ 櫓で漕げる船外機が数か月前まであったが、現時点での確保が困難。
- ・ 調査結果を踏まえ、本事業の体験化を進めるため専用の船を造ることが不可欠と結論づけた。





## 聞き取り調査 2回目 櫓と櫓船の歴史、素材、使用用途

- ・ 櫓と櫓船は、いつ頃まで使われていたのか
- ・ 櫓はどのように防水処理されていたのか、素材はどのようなものか
- ・ 当時使われていた船の写真は残っているのか
- ・ 櫓船を使い、何をしていたのか

### 結果

- ・ 動力船が主流になるまではほぼ全ての船で櫓が使われていた。
- ・ 1 丁、2 丁、4 丁と船の大きさや用途によって使い分けていた。
- ・ 柿渋を塗り防水性を高め木の腐敗を防いでいた。
- ・ 組み合わせ箇所ゆるみを防ぐために木の皮を隙間に詰めて固定力を向上させていた。
- ・ 櫓腕には軽量の「椎(シイ)」を、櫓脚には強度の高い「樫(カシ)」を使用するのが一般的。両方を樫という人もいた事例も確認できた。
- ・ 動力船が使用されるようになった後でも櫓を使っていた。
- ・ 櫓で漕いで漁に出ており、出羽島から約 6.4 km 離れた大島まで伊勢海老を取りに行っていたという実態が明らかになった。

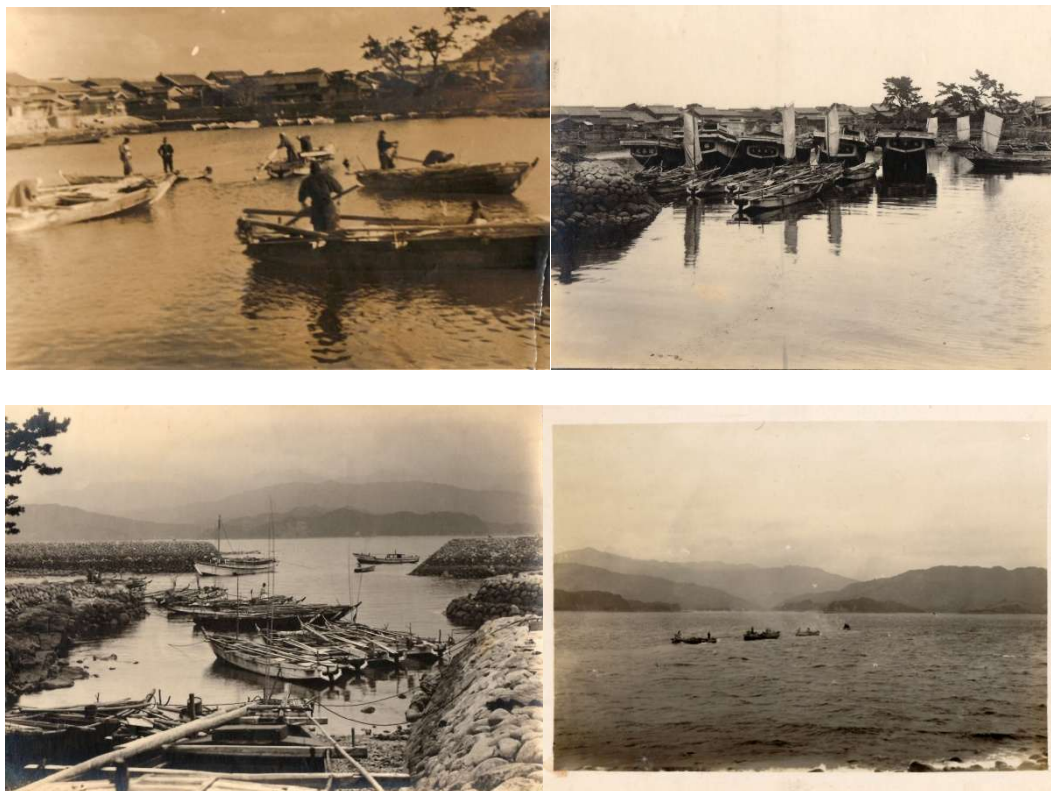
## 資料調査 昔の写真などを調査

島内に写真や映像などが残っていないか聞き取り調査を行った

### 結果

- ・ 昭和初期の生活実態を捉えた写真が多数残っていることを確認した。さらに昭和 26 年（1951 年）制作の映画、テレビの番組資料を発見し、写真だけでは伝わりにくい当時の人々の動きや生活風景が把握できた。
- ・ 写真から帆がついた船が活用されていたことが確認できた。
- ・ 映像資料の分析により、当時は櫓と帆を効率的に使用していたことが判明した。櫓を用いて島外へ漕ぎ出し、風力が得られる外海においては、帆を使い航行していたようである。

- ・多くの船が艘を操って漁に出ている事実は、この技術が島民の日常生活に深く浸透していたことを裏付けている。
- ・映像内では小学生が放課後に艘を漕いで大島まで魚を突きに行く描写がある。その正確性には慎重な判断を要するが、子供が上手に艘を漕いでいることから、生業のみならず、世代を問わず深く根ざしていたことを象徴している。



(平野邦子さん提供)

## 島内で見つけた艘の再生

牟岐港周辺に置かれている艘はボルトで固定されていたり、FRP で結合されていたりと木製部材のみの艘はなかった。一方、出羽島内では針金（内部が金属、外部は布状の素材）で固定された当時の艘を発見することが出来た。針金は錆びて傷んでいるが艘本体は良い状態だったため当該個体を再生・修復させる事にした。

### 再生の方法は下の通り



- ・まず傷んだ針金を切断、分解し3つのパーツに分け、木部に傷みが無いか確認した



- ・傷んだ部分が少ないので薄皮を削り表面の汚れを除去した。
- ・柿渋の代わりに木用防腐剤で表面を処理した。



- ・分解したパーツを組み合わせステンレス製の針金で締め上げ固定する。  
その上からマグロ漁用の縄でさらに固定した。作業にあたっては島内漁師が所有する道具を使用し、技術指導のもと複数人で作業した。
- ・艀ぐいに乗せるパーツ（いれこ）は大きさが合わないため小刀で削り大きさを合わせた。  
（なお、この工程は高校生のラーケーションの一部として、伝統の一端に触れる学習機会と位置づけ削り体験として関わってもらった。）



艀の縛り方動画 URL

<https://youtu.be/0yT20INGu18>

## 艀船の確保

島内には実用可能な木製の艀船が現存していなかったため、島民から提供を受けた既存のFRP（繊維強化プラスチック）船体を活用し、艀船としての再生を図った。

提供時の船体はデッキに穴が開き、内部に雨水が溜まるなど損傷が著しい状態であったが、穴埋め作業や船体全体の補修・塗装を施し、機能を回復させた。さらに、艀を操るための重要な基盤として、船尾の「櫓床（ろどこ）」に、艀の支点となる突起状の部品「艀ぐい」を新たに設置した。

修理方法については以下の写真資料に記録した通りである。

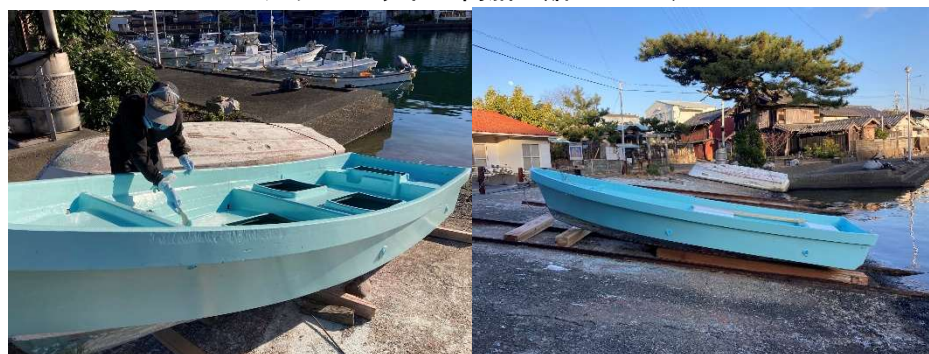
・FRPでの修理



割れている部分を削り取る



ガラスマットを樹脂で貼っていく



ガラスマットが固まればバリを削り取り塗装を行う。綺麗な空色に仕上がった。



艀ぐいを設置し完成

牟岐町内において艀の製造をしていた店舗の存在を聞くことは出来たが、艀の造り方を詳細に把握している人を特定することは出来なかった。

本事業では、造船所で60年以上のキャリアを有する熟練の船大工への聞き取りを行った。当該船大工の証言によれば、70年前の時点で新しく艀を造らず修理して使っていたらしく、この頃から金属のボルトで部材が固定されだした様だった。しかし、金属と木は硬さの違いから相性が悪く、金属の周りの木が傷みやすいという素材の特性上の課題も指摘された。

## 第3章 学生・若者たちと連携

### 聞き取り調査内容

令和7年 9月27日、28日

場 所：民宿まるわ

対象者：島民5名(田中夫妻・鈴木夫妻・山村さん)

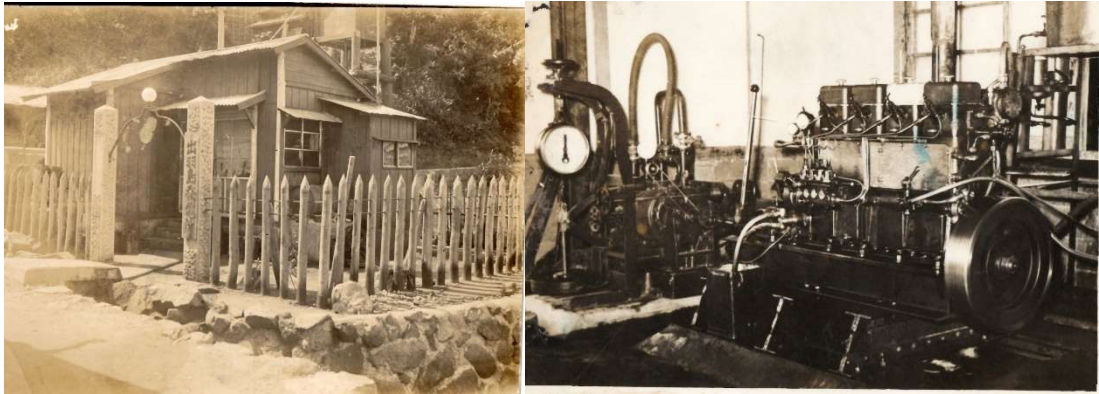
参加者：学生4名／一般社団法人オケヤ出羽島2名／地域おこし協力隊1名／その他2名

### ①聞き取り等調査

学生による聞き取り内容を、当時の臨場感と発言の趣旨を保持するため、極力加筆修正を行わずに記載する。

#### 電気 昭和41年電気開通（田中幸壽談）

電気がない時代は石油ランプで生活していた。昭和29年（1954年）頃から約10年間、発電所で船のディーゼルエンジンを用いて発電していた。



（平野邦子さん所蔵）

- ・各家庭に電気を行き渡らせる為、使用できるのは1軒につき40ワットの裸電球1つ、トイレに3～5ワットの豆電球1つと決められていた。
- ・エンジンが古くなり機能が低下してくると、発電しても1時間ほどしか電気が使えなかった。
- ・昭和41年（1966年）に海底ケーブルが引かれ島に電気が開通した。
- ・水道ケーブルより電気が開通した時の方が深く印象に残っている。
- ・水は井戸で汲めばそれほど不自由には思わなかったが、電気が来たことで人並みの生活ができるようになった(照明や家電の使用)のが嬉しかった。  
当時は、力道山の全盛期で、ナショナルの6インチテレビを買って9インチの拡大鏡を付けて、仲間と集まり観戦していた。

#### 水道 昭和48年開通（田中幸壽談）

- ・水道がない時代は井戸水を汲み、飲用水・生活用水として使用していた。  
（◆手作業かクルマで運んでいた ※映画「島の子供たち」で登場）

- ・島内には 5 か所ほど井戸があり、メインの井戸は島の中心部を流れる谷の麓のもので一番水質もよく水量も多かった。
- ・水の少ない時期に限り、何時でも汲めるわけではなく、組み分けで時間と日を決め分け合って生活していた。特に冬の乾季には水が少なかったため、風呂も親戚や近所回りで貸し借りしていたとか・・・

## 気候・地形

- ・島は港が北向きで南の山が高く、風や波に強く台風被害も少ない。



(台風時の海峡写真 田中幸壽さん提供)

- ・1年中ハイビスカスの花が咲き、亜熱帯気候で黒潮の影響か本土よりやや暖かい。

## 汲み取り

- ・島の東西海岸に 2 か所肥溜めがあり、平成頭ごろに汲み取り船(ひまわり)がくるまで手汲みで肥溜めまで人力で運んでいた。
- ・はじめに洲鼻側(西)の肥溜めが波で崩壊する。
- ・肥溜めができて数年後より漁場が豊富になり、海藻が増え貝も大きく育った。

## 漁業

- ・昭和 48 年(1973 年)頃より天草(テングサ)が大漁に上がるようになり、他所より上質で砂の混じりもなく、高値で取引された。
- ・春一番の到来と共に天草の水揚げが始まりだし、島の堤防・砂浜(ビニールを敷いて仕切っていた) さらに道路に至るまで天草が干してあった。
- ・天草の時期になると島中天草の匂いが漂う。乾燥の工程は大変で、ゴミや他の海藻を取ったり、均一に乾燥させるため裏返したりしなくてはならない。にわか雨が降ることもあるので、天候の変化には注意していた。

◆当時の作業風景を記録した映像資料(ビデオテープ)については、部落長によって保管されており、現在はデジタル化による保存措置が完了している

## 作物

- ・稲作も少しの間していたが、短期間で終了するに至った。
- ・ミカンが昔から作られており、島にしかない種類もあった。獣害がないため、比較的作物を育てるのに適している。島の山を開墾して各家庭で畑（段々畑）を作っていたため、当時は島にも農協の支所があった。

◆映画「島の子供たち」の劇中映像からは、段々畑が広大だった事がわかる。収穫した芋をバケツに入れて運ぶ様子も映っている。

## 教育

- ・明治 15 年（1882 年）牟岐浦村外四村連合学区の牟岐小学校出羽分校として毘沙門さんの舞台を仮校舎とし創立。明治 19 年（1886 年）出羽島小学簡易科として独立。明治 25 年（1892 年）尋常小学校となる。
- ・創立～明治 39 年（1906 年）まで、初代校長岩村清吉先生（出羽島部落長、牟岐町長を務める）が 1 人で教育をされていたようで、分教場の設置等、出羽島教育において重要な役割を担った。
- ・明治 41 年（1908 年）に分教場を設置したが児童数が 100 名を超えるようになり、漁協と神社の拝殿の 2 ヶ所で勉強し非常に狭隘であった。  
大正 4 年（1915 年）に尋常小学校、分教場共に現在の場所（出羽島 46-2）に移転。  
大正 7 年（1918 年）出羽実業補習学校、次いで大正 10 年（1921 年）水産補習学校を小学校に付設。  
大正 11 年（1922 年）高等科（修業年限 2 か年）を併設し、名前を牟岐町立出羽尋常高等小学校とした。大正 15 年（1926 年）には青年訓練所も付設された。  
昭和 22 年（1947 年）出羽小学校に改称。  
昭和 23 年（1948 年）牟岐中学校出羽分教場設置。  
昭和 34 年（1959 年）出羽島分校、牟岐中学校と合併。
- ・平成 5 年（1993 年）に閉校、平成 21 年（2009 年）に廃校となり 127 年の歴史に幕を下ろす。休校までの 111 年間に尋常小学校、分教場合わせ約 2000 人近くの卒業生を送り出した。

## 艦船



（平野邦子さん所蔵）

- ・大きさは現在の船外機より長く幅も広い。60 年前頃までは主流だったが、動力船の普及により段々と需要がなくなり使われなくなる。
- ・艀は各家庭で作られ、先端は櫂、持ち手は軽い椎の木で作られることが多かった。
- ・昔は防腐剤がなかったため、代わりに柿渋を塗っていた。
- ・主に漁に使われており、1丁、2丁、4丁と船の大きさや用途によって使い分けていた。
- ・島の子供たちは中学生頃になると、自分で艀船を漕いで島の周りに釣りへ出かけていた。
- ・また現代でも漁場によっては艀で漕ぐ方が適しているらしく、船外機に艀杭を付けている漁師さんもいる。

### 家鴨舟



(平野邦子さん所蔵)

- ・昔ははっきりと名前はなく、ただただ「小舟」と呼ばれていた。
- ・子供(小学生ぐらいまで)が乗って、港内で遊んでいた。
- ・大体は親に作ってもらうのできっちり作られていたわけではなく隙間もあったため、浸水してくることもあったが子供の体重なので木の浮力で十分遊べていた。ひっくり返っても起こして、浸水しても中の水を掻き出しながら遊んでいた。各家庭にあったわけではなく、親が器用で作ってくれる家庭や裕福で大工さんに頼める家庭のみが所有していた。また、大人の真似事をして家鴨舟に艀を付けて貰っている子もいた。

### たらい船

- ・「佐渡のたらい舟」のようなたらい船ではなく、行水用の桶(1m以内)や手仕事で作った四角や様々な形のものに乗って遊んでいた。昔は浮き輪もなく子供の遊び道具が少なかったため、桶や木箱に乗って遊び木の板で波に乗っていたそうだ。家鴨舟と違い行水用の桶は各家庭にあったため、男の子女の子関係なく誰もが平等に遊んでいた。

映像資料(出羽島のテレビ特集)視聴①  
昭和 62 年 (1987 年) NHK 父を待つ青い家

9 月 28 日、学生らと出羽島の歴史的背景を把握するため昭和 62 年 (1987 年) 放送の NHK 番組『父を待つ青い家』を視聴した。同映像資料からは、当時の海運業の不況により島から人々が出ていき、空き家が増えていることが記録されていた。人口減少が現在に始まった課題ではなく、1980 年代から顕在化していたことを再確認した。

また、本調査にあたり、番組出演者より資料提供を受けた。

映像資料(映画「島の子供たち」)視聴②  
昭和 26 年 (1951 年)

当時作られた映画を視聴。島の事や子供たちが働いて学校に図書館を作った話が映されている。

映像資料(「島の子供たち 40 年前そして今」)視聴③  
平成 5 年 (1993 年) 四国放送

映画「島の子供たち」から 40 年後の島の子供たちの様子がわかる資料であるテレビ番組を視聴。資料内では出羽島小学校最後の生徒が卒業し、学校は休校になった。

聞き取り等によって得られた出羽島の姿

- 遠洋漁船の船員として長期不在となる男性に代わり、島の日常生活、農業、さらには水汲みなどのインフラ維持の大部分は島に残る女性たちの相互扶助によって担われてきた。
- 離島ゆえに、昭和 40 年代まで電気や水道といった近代インフラが未整備であった。しかし、その不自由さは争いではなく、限られた資源（井戸水等）を組み分けによって公平に分配する「住民による助け合いの体制」を機能させる要因となった。
- 鰹漁の隆盛期には全国から出稼ぎ労働者が集まるほどの活気を見せ、島内には、保育所、小学校、診療所、漁協、農協、郵便局、駐在所、鰹節工場(5 軒)、飲食店（お好み屋）、駄菓子屋、何でも屋等数多くの施設があった。しかし漁業の衰退により、繁栄期に築かれた豊かさを残しつつもその後の急激な開発から免れたことで、当時の生活空間、地域体制がそのまま現代に残っている。

② 艦再生事業への参加

艦と艦船のおひろめ

令和 8 年 (2026 年) 2 月 7 日、天候にも恵まれ、船下ろし、お披露目を学生や島民の方々で行う事が出来た。艦を漕ぐと言うことで 70 代から 90 代までの島民が集まり、昔の話を聞きながら漕ぎ方を教えてもらうことができた。



船下ろし前には学生たちと船名を貼った。



船の下に木材を置き、その上を滑らせながら水面に船を下した。最初は円柱の木材か竹を使い転がしながら下す予定だったが地面の状態が良くなく、凹凸が大きいため木材を使えばどうかと出羽島の漁師からアドバイスをもらった。



島民の方々に漕ぎ方、艀や船の部品についてのアドバイスをもらった。

- ・ 艀についている「いれこ」の形をもう少し深くした方が良い。
- ・ 艀ぐいの周りに艀が落ちないように枕を両サイドに置くと良い。

お披露目には見学者も集まり、懐かしそうに昔話に花が咲いた。このような体験イベントは島民と共に知識と歴史を学べる良い機会になるのではと感じた。

船下ろし、艀漕ぎ動画  
<https://youtu.be/1m0Ve15XVDM>

## 第4章 体験プログラムの企画・提案

### ①出羽島ラーケーション（離島留学）実証

本事業は出羽島に滞在する中で歴史や文化を学び、親子で暮らしを体験することができる離島留学(ラーケーション)を実施するものである。

船に乗っての通勤、通学や島ならではの遊びを体験することによりリピーターやファン層を増やすことができ、島の活気を取り戻せることが期待される。

令和8年1月25日(日)  
牟岐町在住親子3名(うち高校生1名)

#### 実施内容

##### ・魚釣り体験(昔ながらのガガネ釣り専用の竹竿使用※)

水温や潮位の影響もあり竹竿釣りは難しかったが1匹釣ることができた。体験を通じて魚の難しさや先人の知恵を学ぶことができた。なお、島の外回りの岩場での竹竿釣りは未経験者には難しく、転倒の危険性等を考慮して中止した。(※ガガネ：カサゴの地方名)

##### ・艦船作り作業体験

艦と船を繋ぐ大事な部品(いれこ)作りという重要な役割を担ったことで、艦船作りの当事者となった意識や誇りを生み出すことができたと思う。

また艦船の仕組みや歴史を学ぶことによって、新たな知識となり地元を知るきっかけとなった。

##### ・干物作り体験

自分で釣った(あるいは貰った)魚を捌き干物を作ることによって、命のありがたみや工程の手間や難しさを知ることができた。

##### ・街並み散策

古い街並みを散策しながら重要建造物や石積みの堤防、過去の資料や文献に沿って当時の生活を知ることができた。

#### 所感

島での生活は、自然環境と直結しているため参加者にとって非日常的な体験であり、日常の再構築(自らの生活価値を再評価すること)に繋がる。ラーケーション(離島留学)を経ることによって、今後の意識改革や自主性の創出につながる可能性があると感じられた。

#### モデル実施として得られた示唆

- ・文化庁が認定する「100年フード」や島に残る伝統的な料理を学べる機会があれば、食を通して島の歴史背景を学ぶことができるのではないかと(食文化の伝承者である地域住民との連携が必要)

- ・ 離島という環境下が学習意欲をも生むのではないかと考え、現代版の寺子屋の実施等もプログラムの多様化に有効ではないか。（かつて牟岐町内から勉強合宿に来ていた歴史背景がある）
- ・ 今回のモデル実施では、地元教育機関と十分な調整に至らなかったが、今後連携することによってスムーズにラーケーションが行えるようになるのではないか。
- ・ 日帰りで短期間の実施であったが、一定の教育的効果も得られることを確認した。次回は宿泊滞在することでより良い教育効果の深化ができるのではないか。

## 課題

- ・ 島民側の受け入れ体制の整備
- ・ 地元教育機関との連携
- ・ 評価指標の整備
- ・ 宿泊所との連携

### ▶補足▶干物の作り方

- ・ 道具を用意する
- ・ 魚を釣る
- ・ 鱗を落とし内臓、えらを取り、開く
- ・ 開くと同時に洗う
- ・ 塩水に1時間ほど浸す（塩分濃度は5～7%）
- ・ 表面を真水でかるく濯ぐ
- ・ タオルで水気を取り風通しの良い日向に干す
- ・ 表面が乾けば出来上がり



いれこの削り作業



竹竿でのガガネ釣り



出羽島で釣れた魚の干物 アイゴ/アカハタ/グレ/イサギ （写真：体験者撮影）

## 令和8年中のラーケーション実施予定

- ・牟岐町内の家族
- ・東京で生活している牟岐町出身者の親子（デュアルスクール※で帰省時に実施）  
（※デュアルスクール：地方と都市の2つの学校の行き来を容易にし、双方で教育を受けることができる新しい学校のかたち）

## ②出羽島生活体験プログラム実証

出羽島における生活体験型プログラムのモデル実施を通じ、今後の継続的な受入体制構築に向けた課題抽出および効果検証を行った。

令和7年11月17.18日 9名（宿泊5名、4名は当日のみの参加）

### 内 容

#### 1 日目

- ・ 11:30～再生中の艀と艀船の披露、説明
- ・ 12:00～島並散策、砂浜で昼食、ゴロゴロ石トレッキング（子供連れに好評）
- ・ 14:00～オケヤ出羽島にてガリ版体験（参加者4名）（子供連れに好評）
- ・ 14:30～魚釣り（参加者7名）（子供連れに好評）
- ・ 17:00～島民2名協力のもと夕食作り（煮付け、伊勢海老鍋）
- ・ 18:00～獲れた魚、島で貰った伊勢海老で夕飯  
※強風・諸事情のため SUP 体験、船での島廻り中止 ※代替案としてガリ版体験の提供

#### 2 日目

- ・ 06:30～島東側海岸より朝日を望む
- ・ 08:00～伊勢海老漁見学
- ・ 08:30～宿で伊勢海老のおじやで朝食
- ・ 09:00～街並みを一望できる展望台まで散歩
- ・ 10:00～船で島廻り（2名）
- ・ 10:30～船釣り（2名）  
※海産物購入中止 ※参加者都合により 12:20 の船で牟岐港へ  
町内で昼食後解散

### 所感

天候等の外的要因により一部体験内容の変更はあったものの、参加者のニーズに応じた柔軟な対応により、生活体験プログラムとして一定の効果が確認できた。特に、島民との共同作業や漁の見学は島民にとっては日常の一つであるが、参加者にとっては非日常性の高い体験となり、出羽島の生活文化への理解促進につながったと考える。

### 課題と改善案

- ・ 港内での SUP 体験は漁業者との兼ね合いから現時点では実現が難しく、代替案を検討する必要がある。
- ・ 運営においてスタッフ間の連携不足による準備段階での混乱が見受けられた。準備や話し合いはその都度細かくする必要があった。

- ・参加者の満足度を高めるために直接的に島民との関わりを織り込める体験が提供できれば、より充実した滞在になると予想される。次回はこの点を活かし、より安定した運営を実施したい。



イセエビ漁見学



ゴロゴロ石トレッキング



港釣り



ガリ版体験



釣れたアカハタともらったイセエビのみそ汁

(生活体験プログラム写真撮影：株式会社出羽島ごーへい)

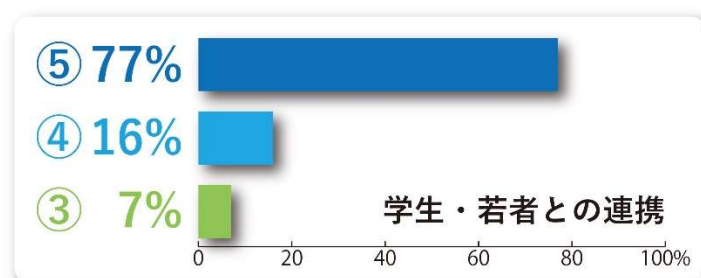
## 第5章 シビックプライドの醸成に関するアンケート調査結果

聞き取り調査や体験プログラムに関わってもらった関係者から下記の内容でアンケート調査を実施した。

島民 3名 / 学生 5名 / 島外 9名 合計 17名

- Q1. あなたの立場を教えてください。
- Q2. 本事業への関わり方として最も近いものはどれですか。
- Q3. 出羽島の文化や暮らしが、どのような理由で現在まで受け継がれてきたのか、その背景を理解できた。
- Q4. 出羽島の文化や生活は、単なる記録だけでなく「守り、残す意味のある価値」だと強く感じる。
- Q5. 出羽島の魅力や特徴について、以前よりも自分の言葉で具体的に誰かに説明できる自信がある。
- Q6. 出羽島を「訪れる観光地」としてではなく、「人の暮らしや営みが続く場所」として捉えるようになった。
- Q7. 自分なりの形（情報の拡散、再来訪、支援等）で、今後の出羽島に関わり続けたいと思う。
- Q8. 今回のような住民と若者が対話する取組は、出羽島の将来にとって重要な一歩であると感じる。  
①全く思わない ②思わない ③どちらともいえない ④思う ⑤非常に思う
- Q9. 今回の取組を通じて、出羽島に対する「見方」や「印象」が変わった点があれば教えてください。（変わっていない場合も、その理由を記載してください）
- Q10. 出羽島の将来に向けて、あなたが「これだけは続いてほしい」「大切に残したい」と感じたものは何ですか。その理由も教えてください。
- Q11. 出羽島の文化や生活を残しつつ人を呼び込むためには、どのような取り組みが必要だと感じましたか。その理由も教えてください。

### 学生・若者たちの回答



Q3~Q8 の回答結果

Q9

- ・ 出羽島を単なる観光地と捉えていたが、島での暮らしを体感し住民と交流することで親近感が湧き、故郷のように感じられるようになり他人事→自分事に変化した。
- ・ 受け継がれてきた伝統や知恵、失われていたかもしれない文化や人とのつながり等、表面的には見えない魅力や価値を感じるようになった。
- ・ 人口減少、空き家の多さ、崩れている家、ゆっくり朽ちていっている印象を受けた。

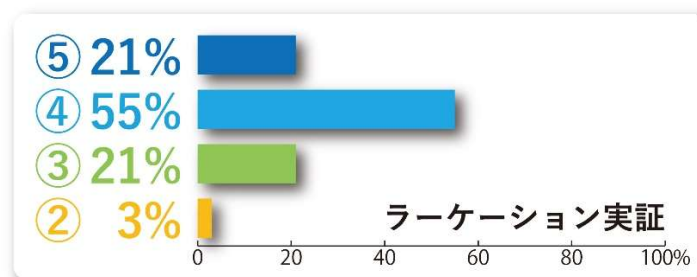
Q10

- ・ 歴史の変遷が読み取れる街並みに比例してせまくなる人の暮らしの領域、暖かい時間や繋がっていることが感じられる雰囲気や関係性を大切にしたい。
- ・ 島の人たちの暮らしのなかで培ってきた知恵や風習、伝統文化は記録として残るのではなく記憶としていつまでも残っていてほしい。
- ・ 人工的に作れるものではない自然の美しさや静けさ、緩く繋がっていることを感じられる雰囲気や温かい時間や関係性は大切にしたい。

Q11

- ・ 島の人だけで島を生きながらえさせることは正直難しいと感じるが、島の暮らしを広め島民を尊重できる理解者を増やすことでどのような未来や目標に進むのかを具体化することが可能になると思う。
- ・ 全国に素晴らしい場所がたくさんある中で不便で刺激の少ない島に住むのは難しいが、まずは出羽島で働ける環境作りや島にしかない仕事を生み出すことが必要ではないか。普段できない体験や楽しいと思えるものを SNS など発信して色んな年代に興味を持ってもらうことや、地方創生に興味津々の学生団体などと持続的に連携していく必要があると感じる。

## ラーケーション関係者の回答



Q3~Q7 の回答結果

Q9

- ・ 子供の時と同じぐらい楽しめる場所だと再認識し、さらに楽しみの幅が広がりもっと深く知りたいと思った。

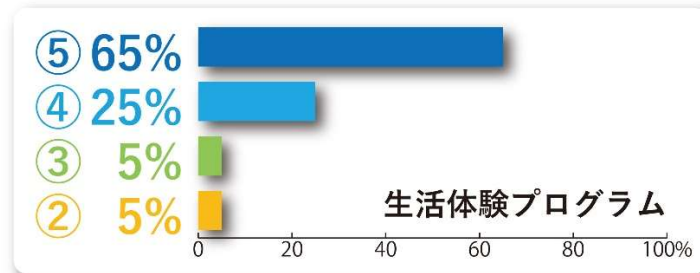
Q10

- ・ 島で暮らしてきた住民の想いや知識を無くすことなく繋げてほしいと思った。知らない道具を見てみたい、竹竿の作り方を教えてほしい。

Q11

- ・島を訪れる観光客が事前に知識を持って来島し、案内人を通じて学び島の人たちと触れ合い直接話を聞くことが出来れば良いと思う。

## 生活体験プログラム関係者の回答



Q3～Q7 の回答結果

Q9

- ・サーフィンができる事しか知らなかったが、自然の遊び場を見つけることができ子供連れにはいい場所だと感じた。
- ・漁業最盛期だった時代を経て暮らしとともに自然と共生し文化を守り続けている姿に、静かな島から活気のある島だったのだと印象が変わった。

Q10

- ・建物や島の景観、支えあい自然と共に生活している「人と人のつながりを大切にする暮らしの姿勢」は都市部では失われつつある価値で次世代に継承すべき財産だと感じた。

Q11

- ・出羽島の文化や暮らしを理解する案内人を通じて島民と関わり、遊びながら学んで「またきてね」と言ってもらえるような「暮らしに触れる体験型の受け入れ体制の整備」が必要だと感じるとともに質の高い関係人口作りが重要である。
- ・出羽島の文化や暮らしに理解のある人が毎年訪れるような体制が出来れば良いと思う反面、自然と触れ合いながら遊ぶことができる最高の場所がリゾート化されることがあってはならないと思う。

## 島民からの回答

Q10

- ・今は島民も少なくなってきたので継続していくのは難しいけど、代々してきた祭りのことやお寺のことはやっぱり 1 番大事、できることなら良いところはずっと残して続けて行ってほしい。
- ・昔からあった島の人同士の繋がりや温かみのある関係性というのが大事やと思う。
- ・代々カツオ漁で栄えた島だからこそ、環境を活かして島での漁は途絶えることなくずっと続けて欲しい。島には美味しい魚や海の幸がたくさんある。

Q11

- ・人が来る分には活気があって良いと思うが、宿泊事業者の組合を作って、ルール決めをちゃんとして仲良くやって欲しい。
- ・来島した人が楽しめるように、浜清掃や景観保全是島の課題だと思うのでそこも考えて欲しい。(空き家の利活用も含め)
- ・島を理解したうえで、自然を大事にしてくれる人に来てもらいたい。

## まとめ

### 学生

来島し島民と直接関わることによって島をより身近に感じ、また帰ってきたいと故郷のようにとらえられる素直で吸収力のある学生らしい意見で、若者目線での総合戦略や持続可能で住み続けられる島作り等もならではと感じた。

### 一般島外者

島での暮らしや受け継がれてきたもの、自然や景観、独特な時間の流れや人とのつながり等現代社会で失われつつあるものに残すべき価値を感じているように思う。

### 島民

自分たちが実際に昔から生活してきたうえで守り継いできたことや伝統文化や風習など、自分たちが島を去るであろう遠くない未来を目前に継承をしたいとの想いを切に感じた。

アンケート全体の結果として、選択式の設問では「非常に思う」および「思う」の回答が圧倒的多数を占めており、本事業が参加者の意識変革や島への愛着形成に大きく寄与することが裏付けられた。

一方で、ラーケーションおよび生活体験プログラムの体験者において、一部「思わない」との回答も確認された。これは、運営面や活動内容の具体化、あるいは継続性といった側面において、今後の改善を要する課題が一部で示唆されたものとする。

分析の結果、以下の3つの示唆を得ることができた。

#### (1) 価値の再発見とシビックプライドの醸成

島民が「不便で大変だった」と感じていた過去の生活を、若者たちが貴重な文化として称賛した。同時に島民側は「この知恵や文化を絶やしたくない」という継承への強い意欲を持っていることが判明した。外部からの評価と島民の自負が重なり合うことで、島を守り継ぐための共通のシビックプライドが醸成される。

(2) 体験で「関係人口」を増やす

島の人だけで文化を守ることは難しくなっているが、単なる観光ではなく、「櫓を漕ぐ」、「魚を釣る」といった体験を通じて、島外の人々が「一度きりの訪問客」から、島の文化を共に守る「関係人口」へと変化する。多様な世代に興味をもってもらうことで、人口が減っても島を支え続ける新しい力となる。

(3) 「不便さ」を学びの資源にする

限られた資源を分け合う島の助け合いの仕組みは、現代社会にとって価値の高い教育モデルになりえると考えられる。不便さをあえて「学び」として提供することで、教える側と学ぶ側の双方が価値を享受し続ける、持続可能な事業モデルとなる。

島の知恵を次世代に継承する取組は、島民が自分の島に改めて誇りを持つきっかけとなる。同時に、島外の人々には島での「共助・繋がり」を通じた深い愛着を生み、出羽島を「第二の故郷」と感じさせる。このように、島の内外で「島を守りたい」という思いが重なり合うことで、シビックプライドが育まれていくと考える。

## 第6章 これからの出羽島は・・・

昭和の新聞やテレビ番組でも取り上げられていたように、人口の減少は今に始まったものではなく 40 年以上前から言われ続けていた事だった事を知る。現在では人口は 30 数人、高齢化も進み消滅の危機に瀕している状態だ。そしてこの人口減少問題は知識の消滅と比例し今も加速度的に進んでいる。

今回の研究で昔の情報の聞き取りを行った際、80 代以上から聞く話は貴重だと感じた。70 代と 80 代以上には生活してきた内容の違いを感じ、その違いは戦前戦後の生活内容の変化では無いかと感じている。この事から現在の 80 代が亡くなれば歴史・伝統・文化を次へ繋いでいくための継承がさらに難しくなるだろう。伝承が可能うちに伝え聞き記録し、また伝え続けることが誇りを受け継ぎ、さらに次世代へと継承していくカギとなる。

昭和 40 年代まで水道、電気が無く近代化に取り残され、その生活の知恵が育んだ伝統文化は「共助と繋がり」の精神で作られられた物だ。先人から得た知識は過去の遺物ではなく、現代社会から失われつつある価値・財産であり若者たちの感性とともにさらに未来へ繋げていかなければならない、ここにしかない誇りだと思う。

今回の研究を通して学生たちは新たな関係人口として実際に島に関わり、暮らしや文化に触れることで故郷とも錯覚しうる意識や誇りが芽生えた。このことから、持続可能な体験の実施や取り組みを通じて、現代社会で失われつつある「共助・繋がり」が残る出羽島では次世代への継承・シビックプライドの醸成が可能であることが伺える。

牟岐町含む県内外の消滅可能性自治体は、島が辿ってきたような見たくない現実と直面する時がやってくるだろう。出羽島は社会の縮図のようなもので、今後の学生・関係人口との関わり方、関わらせ方で未来が変わり、地域の誇りと記憶を持って次世代へと繋ぐ役割を担うであろう人材の育成は十分可能だと感じる。

この調査研究で多くを知り学ぶことができた。あの時やっておけばよかったと思いたくない、やりたいことは今しかできない。自分たちの意思も自ずと強いものへと変化した。

## その他

### ●デジタル化した出羽島に関する資料

- ・映画『島の子供たち』 昭和 26 年（1951 年）蔵原 惟繕（くらはら これよし）制作
- ・アサヒグラフ 昭和 27 年（1952 年）発刊
- ・NHK テレビ番組『父を待つ青い家』 昭和 62 年（1987 年）
- ・四国放送『島の子供たち 40 年前そして今』 平成 5 年（1993 年）
- ・島内保管写真（協力者：田中幸壽氏、平野邦子氏、坂本留美子氏）
- ・三崎港での購買記録（領収書）

### ●牟岐町観光ボランティアガイドの会からの聞き取り調査

#### 【資料出所】

- ・牟岐町観光ボランティアガイドの会（津田修一会長、庄野二六氏）、
- ・平野邦子氏（子孫）聞き取り、
- ・『新編美馬郡郷土誌』、『美馬町史』、『牟岐町観光ボランティアガイド会資料』  
『阿波の歴史小説』

#### 1. 歴史的起源と美馬市との繋がり（配流と移住）

- ・中世から近世の移住  
1237 年（鎌倉時代）の文献に島名が登場するが、本格的な定住は 1801 年、徳島藩主の移住指令を受けた青木家ら 7 名に始まる。
- ・上郡一揆と美馬からの配流（長江与市）  
天保 13 年（1842 年）、美馬郡重清村（現・美馬市美馬町）で発生した「上郡一揆」の首謀者・長江与市とその子・市郎が島へ配流された。市郎の孝心により死罪を免じられたこの父子は島に定着し、明治の特赦後も島に留まった。  
長江家は後に平野姓を名乗り、島内で鯉節工場「ヒライチ」を経営。

#### 2. 産業の隆盛と独自の社会制度

漁業による莫大な収益は、島独自の先進的な社会構造を作り上げた。

- ・カツオ漁と経済発展：  
明治 4 年（1871 年）の官民折半による石積み堤防建設に始まり、大正 3 年（1914 年）の新漁場発見で全盛期を迎えた。島内に 5 軒の鯉節工場が並び、周辺地域からも多くの労働者が流入した。
- ・後の部落長の祖父（田中寅三郎氏）が、7 歳で山間部の木頭（現・那賀町）から学習机（※写真）を自ら担いで入島したエピソードが現在も残っている。
- ・「歩（ぶ）の制度」：  
漁業収益を原資とした島独自の社会福祉制度。出生から小学校卒業まで、および高齢による下船後も一定の給与（歩）を支給。現代の「子ども手当」や「年金」に相当する相互扶助システムが 100 年以上前から機能していた。



(※写真 学習机現物)

### 3. 文化的遺産としての生活・建築様式

物理的・時間的に隔離された環境が、希少な文化的遺産を現代まで保存させた。

- ・生活遺産「ネコぐるま」：  
島島特有の狭隘な路地で水を運搬するために独自改良された「ネコぐるま（手押し車）」は、島の生活文化の象徴である。
- ・重要伝統的建造物群保存地区：  
火災を免れ、再開発が行われなかったため、江戸から明治から昭和前期の建築が密集して残る。（出羽島の集落は国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている）
- ・京都の商家形式：  
島内の民家は「ミセ造り」や格子窓など、京都の商家形式を反映した建築様式が特徴。漁業で得た富を背景に、意匠性の高い欄間や手すりを住宅装飾に取り入れている。
- ・出羽神社：  
檜の巨木を多用した堅牢かつ緻密な彫刻は、当時の漁師たちの財力と信仰の証である。
- ・記録と記念碑：  
1829年の英船キプロス号来航（黒船以前の外圧経験）の記録や、1854年の安政南海地震を伝える「津波の碑」、野口雨情が詠んだ歌碑など、多角的な歴史資料が現存している。

## ●大生丸について

### ■出羽島連絡船歴史年表■

連絡船	就航年	性能	便数	所要	料金
一代目 大生丸	明治初年～	2 t / 木造 / 手押し	1日1便	1時間強	出羽島の人は無料
二代目 大生丸	大正5年～	2 t / 木造 / 動力船	1日2便	40分	大正10年から1人5銭。 後に10銭になる。
三代目 大生丸	昭和10年～	5 t / 木造 / 動力船	1日2便	?分	昭和10年に15銭。昭和12年に1円となる。
四代目 大生丸	昭和14年～	8 t / 木造 / 動力船	1日3便	?分	1円→昭和20年に25円となる。
五代目 大生丸	昭和24年～	11 t / 木造 / 動力船	1日3便→後に4便	30分?	25円→昭和27年に40円になる。
六代目 大生丸	昭和34年 1月～	18 t / 木造 / 動力船 定員84名、60馬力。	1日4便 →後に6便	20分強	40円→昭和39年に50円になる。
七代目 大生丸	昭和??年 ～	? t / 鉄造 / 動力船	1日6便	20分	?
八代目 大生丸	平成6年	? t / FRP造 / 動力船 給油量800L (約11日で空になる)	1日6便	15分	大人220円。子供は半額

ホームページ <http://www.tebamaru.jp/TEBAindex.html> より



歴代大生丸模型 六代目～九代目

### 謝辞

本調査の実施にあたり、島民との信頼関係を活かした聞き取りや資料収集、家鴨舟の再生など、現場の中核を担っていただいた一般社団法人オケヤ出羽島の皆様に深く感謝申し上げます。あわせて、聞き取り調査や貴重な資料提供にご協力いただいた島民および関係者の皆様、ならびに熱意を持って活動に参加された学生や若者の皆様に心より厚く御礼申し上げます。